慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	L・H・モーガンとイロクォイ・リーグ : 民族学史覚書(一)
Sub Title	Lewis Henry Morgan and League of the Iroquois
Author	中村, 孚美(Nakamura, Fumi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1986
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.55, No.4 (1986. 5) ,p.15(285)- 31(301)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19860500-0015

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

L・H・モーガンとイロクォイ・リーグ

——民族学史覚書 (一)——

中村孚美

一　モーガンへの評価

L・H・モーガン (Lewis Henry Morgan, 1818–1881) には四冊の代表的な著書がある。すなわち『古代社会』(*Ancient Society or Reseaches in the Lines of Human Progress from Savagery through Barbarism to Civilization*, New York, 1877)、『人類における血族・姻族の諸体系』(*Systems of Consanguinity and Affinity of the Human Family*, Washington, 1871)、『イロクォイ・リーグ』(*League of the Ho-de-no-sau-nee, or Iroquois*, Rochester, 1851)、および『アメリカ原住民の住居と家族生活』(*Houses and House-Life of the American Aborigins*, Washington, 1881) がそれである。

これらの中で世界的に広く翻訳され、数多くの版を重ねたのは、言うまでもなく『古代社会』であった。だが数あるモーガンの著作の中でこの本ほど時代により、また評者により、積極的・消極的の二極に評価の分れた著作はなかった。その一つの理由は、W・シュミットなどが指摘したように、本書がいくつかの過誤ないし問題点——例えばいわゆる類別的親族名称体系を過去の集団婚の遺制とみるような——を含んでいることにあった。(1) しかし、『古代社会』に対する評価の分裂の一つの要因は、むしろそれがマルクス・エンゲルスによって極めて高く評価され、エンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』の下敷となり、マルクシズムの古典文献の一つに数えられるに至ったことにあるのではなかろうか。

『古代社会』が民族学者、法学者、歴史学者のみなら

ず、社会運動家や広く一般の人びとに読まれたのに対し、『人類におけるの血族・姻族の諸体系』（以下『諸体系』と略記する）は、比較的少数の専門家、特に親族構造論の研究者に読まれた、いわば玄人好みの著作であった。『古代社会』より六年早くスミソニアン研究所から出版されたこの『諸体系』はB5変型版五九〇頁、図版一四頁に及ぶ、『古代社会』を凌ぐ大冊であるが、[2] 内容的には『古代社会』、特にその第三篇の「家族観念の発達」の基礎をなすものであった。[3] 『諸体系』におけるモーガンの目論見の一斑は、いわゆるマレー型、トゥラノ・ガノワニアン型、アーリア・セム・ウラル型の大別して三つの親族体系を設定するとともに、そのうちの一つでイロクォイ族をはじめ北米インディアン諸族にかなり広く見いだされる、いわゆるガノワニアン型体系のアジア起源を立証しようとするものであった。[4]

右に記した『諸体系』に比して、少なくとも我国では、更に言及・紹介されることの少なかった著書は、一八五一年、モーガン三三歳の時に出版された『イロクォイ・リーグ』である。それはA・ゴールデンワイザー（Alexander Goldenweiser）によって、つとに「イロクォイ族についての最良の概説書」と評され、またG・P・マードック（George P. Murdock）の企画したHRAF（Human Relation Area Files）において、最高点の五点を与えられているが、それは「専門の人類学者による最も信頼すべき民族誌的資料」に与えられる評価なのである。またアメリカの大学では、イロクォイ族について学ぼうとする学生が、まず読まされるのは、『古代社会』でも『諸体系』でもなく、この『イロクォイ・リーグ』であるという。

だが何故か我国では『イロクォイ・リーグ』が取上げられることがほとんど無かった。その理由の一つは、本書が地味な民族誌で、『古代社会』のような理論的華々しさに欠けていたからかも知れない。

したがって、このようにイロクォイ研究におけるいわば一等資料の地位を占め、また民族学者モーガンの出発点ともなった本書の内容を把握して置くことは、単にイロクォイ文化の諸相を知るためのみならず、モーガンの民族学の全容を知るためにも是非必要であろう。小論で本書の紹介と検討を試みる理由もそこにある。

なおモーガンの主要著作には、以上にあげた三冊の他に、一八八一年、彼の死の少し前に公刊された『アメリカ原住民の住居と家族生活』（以下『住居と家族生活』と

略記）がある。実はこの著作は「住居建築観念の発達」(Growth of the Idea of House Architecture) のタイトルで『古代社会』の第五篇を形づくるはずであった。しかし原稿がすでに一冊の分量をはるかに越えているとの理由で、この第五篇は削られ、四年後にワシントンの政府印刷局から出版されたのであった。[5] モーガンはいくつかの理由から、この著作をかなり加筆訂正したい意向をもっていたが、彼の健康はすでにそれをすることを許さなかった。本書の内容およびモーガンの全業績の中で本書のもつ意義については、また後に触れたい。

二　『イロクォイ・リーグ』

(1)　ロングハウスの人びと

モーガンの著書『イロクォイ・リーグ』の内容に立入る前に、まずその原書名 *The League of the Ho-de-no-sau-nee, or Iroquois* の意味ないし由来について説明して置かねばならない。ここでホデノソウニ (Ho-de-no-sau-nee) というのはイロクォイ語で「ロングハウスの人びと」の意であり、それはまた自称の種族名ないし部族連合体の名称でもあった。

ちなみに、イロクォイ族は北米インディアン諸族の中でいわゆる「東部森林文化領域」の北部に住む種族で、本来狩猟・漁撈・採集を行なっていたが、比較的早くからトウモロコシなどの栽培を始め、一七世紀初め彼らがヨーロッパ人と接触するようになった時には、その多くは一年の大部分を何戸かのロングハウスからなる定着的な村落に住んでいたのであった。

彼らの種族名にもなったこのロングハウスは間口五・二メートル余り、奥行一〇数メートル、時には奥行三〇メートルにも及ぶ文字通りの長屋で、中央に通路ないし廊下が通り、その両側に幅一・八から二・五メートルほどの間隔で仕切られた部屋が並び、中央の廊下には一定間隔にいくつかの炉が設置されていた。このロングハウスは、構造的には間口の幅で平行に二列に立てられた列柱にアーチ状にたわめた木材を掛け渡し、その上を数本の桁で押え、柱・アーチ状木材・桁の交点を植物のつるで縛り合せ、更に屋根にも壁にもニレなどの樹皮を張ったものであった。したがって外観はカマボコ型の家になったが、場所によっては切妻型の屋根を掛ける所もあった。[6]

一戸のロングハウスに住む人びとは、通常相互に母系の血縁関係で繋がる人びととその夫たちから成立ってい

た。このロングハウスは婚姻や養取によって家族数が増えると簡単に建増すことができた。このようにロングハウス広げていく事をイロクォイの人びとは比喩的に「筏を広げる」"extending the rafters"と表現した。[7] それはまた相互に親縁関係にある人びとの協力関係を増すことをも意味した。

(2)　三部構成

モーガンの『イロクォイ・リーグ』はこのようなロングハウスに住み、相互に親縁関係のある五部族――つまりモホーク（Mohawk）、オナイダ（Oneida）、オノンダガ（Onondaga）、カユガ（Cayuga）、セネカ（Seneca）――が協力して五族連合を形成した人びとの民族誌であるが、それは次の三部から構成されている。

すなわち、第一部「リーグの構造」（Structure of the League）では、部族連合形成の経緯とその内部機構など後の『古代社会』の第二篇で取り上げられる問題が論じられている。

第二部「リーグの精神」（Spirit of the League）では、イロクォイ族の信仰する神々ないし諸神霊と、それらの神々に捧げられる様々の祭儀がかなり細かく記述されている。こうした問題は、モーガンの後の著作では殆ど扱われなくなる主題であるだけに極めて興味深い。第三部は「リーグの附帯事項」（Incident to the League）と題し、第一部第二部で取り上げられなかった諸問題について記述しているが、主な内容は、イロクォイ族の物質文化と言語の問題である。しかも力点はむしろ物質文化に置かれているが、その問題についてはまた後に紹介したい。言語の項ではイロクォイ語の諸方言、品詞、文章構成法、地名のつけ方などが簡略に述べられており、イロクォイ文化を知る手掛りを与えてくれる。

なお、『イロクォイ・リーグ』を構成する三部分が量的にみてどのように配分されているかを調べてみると、第一部の「リーグの構造」が一四六頁で全体の三一・七パーセント、第二部の「リーグの精神」が二〇二頁で四三・三パーセント、第三部の「附帯事項」が一一三頁で二四・五パーセントであり、第二部に全体の半分弱の紙幅が費いやされていることが分る。この点からみても、「信仰と祭儀」を扱ったこの部分を著者がかなり重視していたことが読み取れるのである。イロクォイ族の種族形成史と一七世紀以降におけるヨーロッパ諸勢力との関係は第一部で取扱われている。

では次に各部にどのような民族誌的記述がみられるの

かをやや詳しく検討してみよう。

三　リーグのなりたち

(1)　リーグの形成

モーガンによれば「イロクォイ族はメキシコとペルーのインディアンを除けば、他のいかなるインディアンより高度な社会組織をつくりあげ、多大の勢力を獲得した」種族であった。[8] このモーガンの評価をそのまま受入れるかどうかは別としても、イロクォイ族がヨーロッパ人の到来以降、一七―一八世紀の北米の歴史において、極めて重要な役割をはたした種族であったことは確かである。そしてこの時期におけるイロクォイ族の大躍進を可能にした一つの要因が、彼らの結成した部族連合即ちイロクォイ・リーグにあったこともまた確かであろう。

しかし、イロクォイ族がいつ部族連合を形成したか、その時期はヨーロッパ人の到来の前であったか後であったか、については諸説があり、必ずしも意見は一致しない。[9] ただしイロクォイ族がどのような経緯でニューヨークの中心部に移住し、やがて部族連合を形成するに至ったについては、モーガンはおよそ次のような口頭伝承を記録している。

その伝承によると、イロクォイ族はニューヨーク州に住みつく前には、モントリオール近くのセントローレンス川北岸に住み、アルゴンキン系のアディロンダック族に支配されていた。その頃イロクォイ族はまだ一部族であった。イロクォイ族はアディロンダック族から〔トウモロコシの〕耕作を習い、彼らと共に戦争に出かけたりしていた。やがて人口もふえたので自分たちのクニを確保しようとしたが、アディロンダック族との間に戦いが始まり皆殺しにされそうになった。そこでイロクォイ族はセントローレンス川をオンタリオ湖まで遡行してオスウェゴ川に至り、その水路を通ってニューヨーク州の中心部に入った。[10]

その後イロクォイ族は幾つかの群に分れて新しい村をつくるために分散していき、やがて五部族の成立をみるのだが、モーガンはその推移をかなり細かく記録している。ここにそのすべてを記述する紙幅の余裕はないが、モーガンがイロクォイ族の種族史（エスノヒストリー）を再構成するに当って、彼らの口頭伝承をかなり重視していたことは確かであろう。ちなみにリーグ結成の時期については諸説があるものの、結成に伴う事情についてはイロクォイ族の口碑は一致していた。つまりリーグ結成の計画は、隣接諸

族の圧力に対してより効果的に対処するための一手段として、オノンダガ族から提案され、他の四部族がこれに同調したのだという。

ともあれ、いったんリーグが形成されるとその効果は大きかった。即ち、それはイロクォイ諸族間の内紛を抑制することで、彼らの外敵に対する政治力と軍事力を高めた。イロクォイ族は宿敵アディロンダック族、ヒューロン族を屈服させると、その余勢をかって、たちまちのうちに、東はニューイングランドから西はミシシッピ川に至るまで、北は五大湖の北辺から南はカロライナの丘陵地帯に至るまで、その勢力圏を拡大した。(11)

一六一五年、オランダの交易所がオレンジすなわち現在のオルバニー（Albany）に設立されたが、これはイロクォイにとって新時代の幕明けとなった。つまりこの時からイロクォイとオランダ人との間に友好関係が成立するのだが、当時、オランダ人を含めてヨーロッパの商人が求めたものは、第一に毛皮交易であった。そしてイロクォイ族の本拠となったニューヨーク州北部のオンタリオ湖南岸の地域は毛皮交易の要衝であった。この地域の西側には西部の毛皮産地に通ずる重要なルートが開けていたし、南にはヨーロッパ人の需要が多いビーバーの生息地があり、北にはセントローレンス川の水源であり大西洋と西部とを繋ぐ重要なルートでもあるオンタリオ湖が開けていた。要するにイロクォイ族は毛皮の集荷と搬出にとって絶好の地の利を占めていたのである。(12)

イロクォイは彼らの集めた毛皮と引き替えにヨーロッパ製の布や銃を手に入れた。銃を所持しはじめるとイロクォイの他のインディアン諸族に対する支配権は急速に高まっていった。

一六六四年、オランダがハドソン湾の領有権をイギリスに引渡すとイギリス人はオランダ人に代ってイロクォイ族との友好関係を結んだ。「両者の間の友好関係は、アメリカ諸州の独立によりイギリスのアメリカに対する管轄権が終了するまで続いた」とモーガンは述べている。(13)

他方、フランスとイロクォイとの関係は当初から、これとは違っていた。植民の初期段階でフランス人がイロクォイ族の宿敵であるアディロンダック族と手を結んだ事も、両者の関係を悪化させる一要因となった。フランスの毛皮交易はエリー、オンタリオ両湖からセントローレンス川上流域にかけて出没するイロクォイの戦闘集団のために著しい被害をうけた。フランスはイロクォイをイギリスから離反させるか、あるいはまたこれを征服す

るか、二つの道を試してみたが、いずれも失敗に終った。フランス軍と配下のインディアンがイロクォイの要害堅固な村に攻め込むと、多くの場合イロクォイ族はすでに森の奥深くに退去した後だったからである。モーガンによれば、「フランス人はイロクォイ族に抵抗されなければ、ニューヨーク州の大部分を領有していたはずである」[14]という。

(2) リーグのなりたち

では北米における英仏植民地形成の時代に両国の力関係に多大の影響力を及ぼしたイロクォイ・リーグなるものの実体はどのようなものであったのであろうか。モーガンも指摘するように、リーグの内部機構は外見上極めて不明瞭であった。

リーグの意志決定機関あるいは事実上の中央政府を形づくったのは、イロクォイ五部族の各々から選出された五〇人の正首長（sachem）から構成される首長会議であった。これら正首長の各々はその権力において同等で、五〇人が一体となってリーグ全体に支配権を行使するのであり、各々が自己の出身部族に対して管轄権を有するものではなかった。つまり各部族はリーグに対して、アメリカ諸州が合衆国に対するのと同等の関係を維持していたのである。

なお、これら五〇の正首長職には、それぞれ特有の名前ないしタイトルが付着していて、それらの名前ないしタイトルは各部族の下位集団を構成する氏族あるいはリネージにより世襲されていた。ただし特定の氏族ないしリネージの中で誰にそのタイトルを襲名させるか、つまり誰を正首長に選ぶかは当の氏族ないしリネージの人々が決定した。正首長に選ばれて特定の名前を襲名した者は、以後本名ではなくその名前ないしタイトルで呼ばれた。また正首長職は何故か五部族に不平等に分配されていたが、多くの首長職の株ないしタイトルを持つ部族が政治権力において優越することはなかったという。モーガンはイロクォイ族のこのような統治機構を寡頭政治と規定している。[15]

これらの正首長たちは定められた時に、通常は毎年秋に、事実上の政庁所在地であるオノンダガで開かれる会議に出席した。ただし各部族にかかわる急務の生じた時には臨時会議が召集されたが、その場合はいずれの部族領域でもよかった。首長会議における決定は万場一致を原則とした。

リーグ結成から年月がたち、白人との交渉が頻繁にな

るにつれ、新しい種類の首長（チーフ）を立てる必要が生じた。この首長職は「高められた名」と称され、出自によってではなく選挙により、あるいは勲功に対する報賞としてその地位が与えられるもので、正首長職におけるような人数の制限がなかった。モーガンによれば、これら新種の首長（チーフ）は、本来自己の部族内における「地方的」問題に関与する者であり、また問題の処理にあたっても、統治者としての資格ではなく、正首長たちの相談役ないし助手としてであった。しかし時を経るにつれ、このいわば副首長の影響力は拡大し、正首長の権威権力を蚕食していった。ただし副首長の在任期間はあくまで一代限りであった。また正首長も副首長も、その性格は文官であった。

ところが外部からの圧力が強まり、イロクォイ諸部族が共同して戦いに臨む事態が多発するに至って、二人の最高軍事首長が任命される事になった。彼らの任務は戦場で実戦の指揮をとるよりも、むしろ全体的な戦闘計画の立案とその管理にあった。しかもその地位は世襲であった。(16)

特定の個人への権力集中を嫌い、分権主義を旨としていたイロクォイ族にあっては、彼らの出現は大きな変化であったはずである。

四　「リーグの精神」

(1)　イロクォイ族の神々

イロクォイ族は他の多くのインディアンと同様に宗教儀礼を尊重する種族である。本章でモーガンは彼らが信仰する神々とその諸属性を精彩のある筆致で描き出している。その詩情あふれる描写は、イロクォイの人々の生活の営みや精神の世界を垣間見させてくれるのに充分である。

イロクォイの神々は一種のパンテオンを形成していたが、その最上位に位置するのがハーウェンネユと呼ばれる神であった。それはセネカ方言で「支配者」を意味し、人間及び人間にとって有用な動植物を創造した神で、善神であるとともに最高神であった。この善なる神に対立するのが悪神（Evil Spirit）であり、人間に害悪を及ぼす破壊的動物――たとえば毒をもつ爬虫類や怪物、有毒な植物を創った神であった。この悪神は、もともと最高神の兄弟あるいは双生児であったともいう。最高神は悪神に対し進んで実力行使をすることはないが、いざとなればこれに打勝つ力を備えていた。善悪両神は、それぞれ独立の世界と固有の力をもっていた。

最高神と悪神の下には、これより劣位のさまざまの霊的存在がいたが、それらもまた善悪に分れていた。即ち、善神は最高神の補佐役、協力者であり、悪霊は悪神の使者、密偵ないし家来であった。

最高神の補佐役の筆頭は雷神ヘノであった。雷はもともと警告の声であり復讐の手段であったが、最高神はこれに雲を作ることと地上に雨の恵みを与えることを委ねた。雷神の力により大地は冷え、再生し、植物は維持され作物と野生の果実は実るのであった。雷神は恵みの神であるとともに、悪事を働く者や妖術師に対しては恐ろしい罰を下す力をもっていた。雷神は人間の形をしていて戦士の衣裳をまとい、頭上には魔法の羽根をつけていたが、この羽根が悪神の攻撃に対して彼を不死身にしていた。彼はまた背に堅い岩石のかけらの入った籠を背負い、雲に乗って移動し、もろもろの悪霊や妖術師をみつけると、その石のかけらを投げつけるのであった。イロクォイの人々は雷神ヘノを愛着をこめて「おじいさん」と呼び自分たちをその「孫」と呼んでいた。

イロクォイの創造したもう一柱の神はガオと呼ばれる風神であった。ガオもまた最高神の媒介者であり、最高神は彼を通して自然界を構成する諸要素を動かした。ガオは老人の顔をしていて、天の一角に西向きに建つ「風の大殿堂」に住み、耳ざわりな風に取り囲まれながら孤独な生活を送っていた。彼は自然界の諸要素に圧迫されながら、自らを解放しようとして戦っていた。彼が不動のときは風は休息していたが、彼が少しでも動くと地表にやさしい微風を送り、彼が自分を取巻く諸力にあらがう時には雲を動かし水を波立たせ森の樹さえゆさぶるのであった。だがガオは本質的には恵み深い神であった。[17]

イロクォイの神々の中で特に注目されるのは「三姉妹」(three sisters) すなわち、トウモロコシ・マメ・カボチャの神であった。これらの植物は最高神の人々への特別の贈物とみなされていた。この三柱の神々は美しい女性の姿をしていて互いに仲良しで、一緒に住むことを楽しんでいると考えられていた。モーガンはこうした信仰は、これらの植物が同じ畑、同じ山腹に育つという植物自体の自然への適応によって説明できるとしている。

彼女たちの衣裳はそれぞれの植物の葉でできており、成育期には、彼女たちはそれぞれの畑を訪れ、それらの植物と共に住むと信じられていた。この三種の植物はデオハコ (Deohako) と呼ばれたが、それは「我々の命」あるいは「我々の扶養者」を意味していた。[18]

こうした表現は、もともと狩猟採集民であったイロクォイ族にとって、これらの栽培植物がもたらした恩恵がいかに大きかったかを示しているように思われる。

(2) イロクォイ族の祭儀

イロクォイ族は最高神を中心とする諸神霊に対して、季節の変り目ごとに祭りを行った。彼らが一年の間に定期的に行う祭りには次の六つがあった。

㈠ カエデ祭り（the Maple Festival）　この祭りでは甘い樹液を出してくれるカエデに感謝を捧げるとともに、そのようなカエデを人々に贈与してくれた最高神に感謝を捧げる。

㈡ 植付け祭り（the Planting Festival）　最高神を呼び出し、地中に蒔いた種子を祝福して貰う。

㈢ イチゴ祭り（the Strawberry Festival）　大地の果実の初穂祝いで野生植物とくに漿果類の実りを祝う。

㈣ 青トウモロコシの祭り（the Green Corn Festival）　トウモロコシ、マメ、カボチャの成長を感謝する祭り。

㈤ 収穫祭（the Harvest Festival）　〝我々の支持者〟すなわちトウモロコシ、マメ、カボチャに対する感謝祭で、これらの作物の収穫後に行われる。

㈥ 新年祭（the New Year's Festival）　イロクォイの大祭で、白犬の供犠が行われる。

これらの祭りは㈥の新年祭をのぞけば、儀礼の次第や神々に捧げる祈願の内容において、相互に極めて類似し、重なり合う要素が多くみられる。そこに認められる共通の要素は、大地の恵みをもたらしてくれる最高神と諸神霊に感謝を捧げ、神々が引続き人々に恩恵を与えてくれるように祈願することであった。

なおこれらの祭儀はイロクォイ・リーグの首長会議とは違い、リーグを構成する五部族の人々が一ヶ所に集合して行うのではなく、幾つかの部族の幾つかの村々で別別に行われた。

またイロクォイ族には専門的な高位の聖職者はいなかったので、これらの祭儀の執行にあたっては一般の人人の中から「信仰の管理者」(Keepers of the Faith) と呼ばれる役職者が選ばれ、儀礼の監督、進行、世話役を勤めた。信仰の管理者には定員がなく、男女とも同じ資格でこの役に就くことができ、職務に忠実である限りその地位は継続した。ちなみに信仰の管理者の重要な役割の一つは祭りに先立って「悔い改めの会」――集会者が自己の悪行の告白をして将来に向けて改心を誓う会――

を開くことであった。

この会の後数日して正規の祭りが開始された。祭儀の主要な行事は、どの祭りにおいても、数人の「信仰の管理者」による道徳上の勧告ないし演説、ダンス――特に最高神が人間に与えたという「偉大なる羽根のダンス」――最高神に火に燻べたタバコの葉の香煙とともに捧げる感謝の祈り、そして一般のダンスと祝宴であった。[20]

イロクォイ族の祭儀は、新年祭をのぞきおしなべて大地の実りに対する感謝祭であり、それは野生植物の実り（カエデの樹液、イチゴ類等）に対しても、栽培植物の実り（トウモロコシ、マメ、カボチャ）に対しても基本的には同じやり方で感謝が捧げられた。だが強いて言えば、彼らの主食であるトウモロコシが食べられるようになった事を祝う「青トウモロコシの祭り」と、一年の最後に行われる「我々の扶養者」の収穫祭は、祝宴も四日間にわたり、ひときわ豪華に祝われ喜びに満ちたもののようであった。[21]

トウモロコシ栽培に関連して注目されるのは、モーガンが本書に脚注の形で記したトウモロコシの起源に関する、いわゆるオオゲツヒメ型の神話である。この神話によれば、トウモロコシは、最高神の母が埋葬された後に彼女の胸から生えたという。[22] 前述のようにイロクォイ族の社会は母系制ではあるが、その主要な神々は「三姉妹」をのぞき、ほとんどすべて男性である。そしてこの「三姉妹」もトウモロコシの神、マメの神、カボチャの神のいわば三人組の女神が一括してそのように呼ばれるだけであって、男神である雷神ヘノや風神ガオのような個性に欠けている。しかし、彼らが一番大切な食料と考えているトウモロコシを生み出した穀母には、最高神の母として特別の地位が与えられているのである。

なお、イロクォイの祭儀において朗唱される祈願文には、「我らが母なる大地に感謝し奉る」あるいは「我らが母なる大地よ」という語句がしばしば出てくる。[23] この点に関してモーガンは特に注釈を加えていないが、ここでいう「母なる大地」はいちおう大地母神と考えてよいであろう。

ともあれ先述の穀母神話がどのような経緯でイロクォイ族の間で伝えられるに至ったかは、イロクォイ族にいつ頃どのような経路でトウモロコシ栽培が伝えられたという問題とともに、興味をそられる問題である。

以上に紹介した諸祭儀とかなり性格を異にするのが新年祭である。それは白犬の供犠を主要な行事とする祭り

であって、祭りの初日に絞殺された白犬が、五日目の早暁、多くの供物とともに焼かれるのである。これは一種の無血供犠であるが、モーガンの見解では、この白犬は人間の罪を償うための犠牲の小羊ではなく、人々の変らぬ忠誠と感謝の気持を最高神に伝えるために、人間から最高神のもとに送られた使いであるという。

なお白犬の供犠に際してもタバコの葉が火に燻べられるが、タバコの香煙は人間が造物主である最高神と心をかよわす媒介であった。また白は、イロクォイにとって清浄と誠実を象徴する色であり、犬は、元来猟人であった彼らの忠実なる友であり、彼らの忠誠心を表わしていた。

動物の霊を神への使いとして送るモチーフは、アイヌ族の熊送りなどにも通ずる要素であり、イロクォイ族における狩猟民的な文化伝統と考えることができるであろう。また動物の無血供犠はモンゴル族などにもみられた習俗であった。

五　物質文化への関心

小文の始めに触れたように、モーガンは『イロクォイリーグ』の第三部で、イロクォイ族の物質文化の問題をとりあげている。彼はまず、ニューヨーク州に大別して二種の時代を異にする遺跡が存在することに注目し、第一の古い層は、いわゆる〝マウンド・ビルダーズ〟の残した防御施設、マウンド、聖域などからなり、第二のより新しい層は、イロクォイ族、あるいは〝マウンド・ビルダーズ〟によって排除された人々に関連しているとする。そして明らかにイロクォイの遺物とみられるものとして、食物をいれて遺体とともに副葬された粗製の土器や、特有の形をしたパイプなどをあげている。またイロクォイ族がヨーロッパ人と接触する以前に用いたチャート製の鹿の皮剝ぎ用のナイフ、工具として用いた石製のみ、石製のトマホーク、戦闘棒の他、歴史時代になっても使用されている樹皮繊維製の荷負紐、トウモロコシ粉砕用の臼と杵、その他の生活用具についても、しばしば図入りで説明されている。[24]

特に注目されるのは、この地域における樹皮の多方面にわたる利用で、ニレやシナの樹皮で作られた大小さまざまの容器、二人乗りから三〇人乗りのものまである樹皮製のカヌーなどにつき、その形態、製作法、使用法などを含めて、かなり細かい記述がなされている。[25]

『イロクォイ・リーグ』第三部の主要部分となったこの

論文は、実は、一八四八年、モーガンがニューヨーク州立大学理事会の依頼により、州立博物館のインディアン・コレクションのために標本集収を行った際、大学理事会に提出した報告書に基づいているのである。[26] イロクォイ研究の大御所W・N・フェントン（William N. Fenton）によれば、その際モーガンの提出した報告書には、標本それぞれにつき収集場所、使用法、図が付けられ、まさに「民族誌的報告書の手本」であるという。しかも、この報告書はわずか半年足らずのうちにまとめられたものなのであった。[27]

我々は、モーガンというと、すぐにその社会進化論に基づく親族体系論や統治機構論を想起するのであるが、彼は民族学者として出発する時点で、このような技術文化を含む民族・考古学的分野にも深い関心をいだいていたのであった。そしてそのような関心が決して青年時代だけのものではなかったことは、『古代社会』の最終篇をなすものとして起稿されながら、大部になり過ぎたために、別の書物として彼の最晩年に公刊されることになった『住居と家族生活』を見れば明らかである。

そこでは、アメリカインディアン諸種族の住居――あるいは住居とみなされたもの――が、モーガンの生きていた時代に使用されていたもの、遺跡として残されたもの、あるいは古文書類に記録されたものを含めて取り上げられ、住居建築と家族形態、集落形態、あるいはより大きな社会組織との機能的連関が論じられているのである。それはモーガンがかなり早くからもっていた技術文化に対する関心と、彼の本領である親族体系論、統治機構論との結合であった。

ちなみに、モーガンは一般にフィールドワカーというより書斎派の学者とみられがちであるが、実際には、カンザス、ネブラスカ、ロッキー山脈、ハドソン湾地方、それにニューメキシコなどに、数度におよぶかなり長期の調査旅行を敢行していた。しかもそれらの旅行は、L・ホワイト（Leslie A. White）が指摘するように、白人に敵意をもつ諸部族が戦いをいどんでくる時代に、鉄道がミズーリ川まで完全には届いていない時代に行われたのであった。[28] このような困難な旅にモーガンをかりたてた一つの理由は、この『住居と家族生活』の構想のためだったのではなかろうか。

一九六五年、シカゴ大学出版から再刊されたモーガンの『アメリカ原住民の住居と家族生活』に序文を書いたP・ボハナン（Paul Bohannan）によれば、モーガンの

業績はタイラーやボアズの業績と違い、きわめて体系的に構築されたものなので、その著作のどれか一つを取り上げる場合でも、彼の一連の著作との関連において評価しなければならないという。[29]

このボハナンの忠告に従うならば、モーガンの民族学の全容は、『イロクォイ・リーグ』に始まり『人類における血族・姻族の諸体系』及び『古代社会』を経て『アメリカ原住民の住居と家族生活』に至るモーガンの一連の著作の中で捉えられなければならないであろう。この点、我国の学界では、初期の民族誌的著作である『イロクォイリーグ』と、最晩年に出版された『住居と家族生活』が等閑視されていたきらいがあるのではなかろうか。

民族学史におけるモーガンの位置づけは、改めて検討されるべきものを残している。

六　リーグの時代

周知のように、モーガンの社会進化論は、今世紀にはいると民族誌的事実に必ずしも一致しないという理由から批判をあびることになった。しかし一九五〇年代に入るとL・ホワイトとその弟子たちにより、社会進化の問題は人類学ないし民族学の一つの主要な課題として再登場するようになった。

なかでもE・サーヴィスは、社会の規模の大きさと密度の濃さ、およびその構造的複雑さを手がかりに、産業国民国家に先行する社会統合の諸形態として、バンド、部族、首長制社会、未開国家、古代帝国の五段階を設定した。ここでこの五つの統合形態の各々につきその特徴を説明する余裕はないし、またこの五段階がどの程度当を得たものであるかを検討する余裕もない。しかし仮に、このサーヴィスの設定した段階を、モーガンの描き出したイロクォイ社会に摘用してみると、やはり「首長制社会」がそれに一番近いものとして浮び上ってくる。

ちなみに、サーヴィスの規定した首長制社会は、社会統合のかなめとしての首長権の発生により特徴づけられ、社会を構成する各部分集団の活動は、首長権により調整ないし統制されることになる。しかも首長の威信が高まり、その職務が一族の者によって世襲されるようになると、やがて一般の人々とは区別された身分が形づくられるようになる。更にまた首長制を成立させているもう一つの重要な要素として《生産↓集中↓再分配》の経済システムがある。すなわち、それ以前の部族社会では

個々の家族員によって生産された物は、原則としてその家族内で消費されるのだが、首長制の段階になると、各生産者は自己の生産物の少くとも一部を、贈物ないし貢納の形で首長のもとに差し出すことになる。そしてこのようにして集められた富を、首長は祝宴、祭りその他の〝公共事業〟を通じて、消費者（生産者）に再分配をするのである。しかも首長の威信は、この再分配（それは多くの場合、首長による大盤振舞いの形をとる）を通じて維持ないし拡大されることになる。なお首長による再分配は、当該社会である程度の労働の専門分化が行われていることを前提とするが、首長による労働の組織化は、この専門分化をいっそう促進し生産性を増大させる要因となる、というのである。

このような首長制の規定を、イロクォイの社会にあてはめて考えてみると、たしかにイロクォイ各部族には数人の世襲の首長がいて、その首長たちにより部族が統合されており、更に各部族の世襲首長たちの会議によりイロクォイ連合が成立していることからみて、首長相互間の平等性が強いということはあるにしても、一応首長制であると認定してもよいであろう。しかし、首長制を成立させているもう一つの重要な要素である《生産↓集中↓再分配》の経済システムがイロクォイに成立していたかどうかは、残念ながら不明なのである。モーガンは法律家として統治制度の問題はかなり細かく記述しているのだが、イロクォイの経済システムが、どのようなものであったかについてはほとんど言及していないのである。ただ『古代社会』の中では、イロクォイの〝国家〟が領域に基づいていない故に真の国家ではないという記述がみられるし、『イロクォイ・リーグ』においても、しばしばイロクォイ社会を〝狩猟民国家〟あるいは〝親族国家〟と称しているのである。

イロクォイ族の研究は、現在でも北米の民族学者たちによって、新しい見地から営々として続けられているので、イロクォイ社会の発展のレヴェルについても、今後の研究を待つべきなのかもしれない。

ただ筆者の見るところでは、イロクォイ族の一七、八世紀における大活躍は、彼らの社会の内部的成熟もさることながら、彼らの置かれた地理上の優位性も無視し得ない。

なお、東部森林地帯の北部に当るイロクォイの居住地域にトウモロコシ栽培が導入されたのも、一つの〝歴史的偶然〟とする見解もあるのである。しかしこれらの問

題についてまた機会を改めて論じたいと思う。[30]

注

(1) シュミット著，大野俊一訳『民族と文化——諸民族の社会と経済——』河出書房，一九五七年刊，二〇二—二〇四頁。(W. Schmidt und W. Koppers: *Der Mensch aller Zeiten, Gesellschaft und Wirtschaft der Völker*, Regensburg, 1924, S. 138–140)

(2) L. H. Morgan, *Systems of Consanguinity and Affinity of the Humanfamily*, Smithsonian Contribution to Knowledge 218, Washington 1871 (Anthropological Publications, The Netherlands 1966)

(3) L. H. Morgan, *Ancient Society* 1871 (The Belknap Press of Harvard University Press, 1964, pp. 304–429)

(4) L. H. Morgan 1966, p. 498 馬淵東一「古代社会の内幕」(『馬淵東一著作集』第一巻，四九三—四九五頁)

(5) L. H. Morgan, *Houses and House-Life of the American Aborigins* 1881 (the University of Chicago Press, 1965, xxiii)

(6) L. H. Morgan, 1965, pp. 124–131.

(7) M. K. Foster, J. Campisi, M. Mithun ed. *Extending the Rafters, Interdisciplinary Approaches to Iroquoian Studies*, 1984, State Universtiy of New York Press.

(8) L. H. Morgan, *League of the Ho-de-no-sau-nee, or Iroguois* 1851 (Citadel paperbound printing, 1972, p. 55)

(9) E. Tooker, The League of the Iroguois, Its History, Politics, and Ritual, in B. G. Trigger ed. *Handbook of North American Indians*, Vol. 15 Northeast, Smithsonian Institution, 1978 pp. 418–420.

(10) L. H. Morgan, 1972, pp. 5–6.

(11) *Ibid.*, 1972, p. 8

(12) E. Tooker, 1978, p. 418.

(13) L. H. Morgan, 1972, pp. 9–10.

(14) *Ibid.*, pp. 11–23.

(15) *Ibid.*, pp. 62–63.

(16) *Ibid.*, pp. 71–72.

(17) *Ibid.*, pp. 152–161.

(18) *Ibid.*, p. 161.

(19) *Ibid.*, pp. 182–183.

(20) *Ibid.*, pp. 184–193.

(21) *Ibid.*, pp. 198–207.

(22) *Ibid.*, p. 199

(23) *Ibid.*, p. 219, 220.

(24) *Ibid.*, p. 210, pp. 215–217.

(25) *Ibid.*, pp. 353–371.

(26) L. White, "Introduction" to L. H. Morgan, *Ancient Society*, 1964, xiv.

(27) W. N. Fenton, "Introduction" to L. H. Morgan, *League of the Iroquois*, 1972, xiii-xv.

(28) L. A. White, "Lewis Henry Morgan: Pionneer in the theory of Social Evolution," in H. E. Barns (ed.), *An Introduction to the History of Sociology*. The University of Chicago Press, 1948, p. 139.

(29) P. Bohannan "Introduction" to L. H. Morgan, *Houses and House-Life of the American Aborigins*, The University of Chicago Press, 1965, viii.

(30) 最近の考古学的知見によれば、アメリカ北東部にトウモロコシ栽培が導入されたのは九〇〇年前後から一四〇〇年にかけてであった。おそらく南西部からもたらされたものであろうが、いかなるルートで伝播したかは不明である。ただその後北東部に定着したトウモロコシは、この地にきてから生じた新種か、あるいは原産地に近いグァテマラ高地などですでに比較的寒冷な気候に適応した変種であったであろうと推定されている。北東部における植物栽培の普及については、品種の問題もさることながら、たとえばイロクォイ族のように栽培の開始以前から定着的村落生活に傾斜し、来るべき新しい生活様式に前適応していたという社会的要因も無視できない。もっともイロクォイのすべての集団が同程度にトウモロコシ栽培に移行した訳ではなく一六世紀に入っても依然として漁撈に生計の基礎をおく集団もあった。またすべてのイロクォイは、農耕開始後も多少とも狩猟・漁撈・採集を行い、それは彼らの儀礼にも如実に反映されていた。(Cf, James A. Tuck, "Northern Iroquoian Prehistory", in *Bruce G. Trigger ed. Handbook of North American Indians, Vol. 15 Northeast*, Smithsonian Institution, Washington 1978, pp. 324-326)